

念願の慰霊巡拝

御殿場市遺族会 田代恒輔

長年私の心の奥にあった、父の戦地である中国旧満州地域への慰霊巡拝への思いが今日、日本遺族会より中国東北地区友好親善訪問参加案内が有り、同じ静岡県より参加希望の杉山さんから一緒に参加しないかとお誘いが有り、私はこの機会を逃したらもう行く機会がないと思いきさつそく申し込みました。

後日、幸いにも二人に参加通知が有り安心しました。世間では、もう戦後60年経っているからと一口に言うのを耳にする今日この頃ですが、私たちにとって60年は、色々なことが有りすぎて長く厳しい年月でした。この旅行に参加することに対して、父の顔を知らない弟と姉、母の親子4人で一緒に参加できないことが残念でなりません。

まだ見知らぬ他国の地、父がどんな場所で戦死したのか、この62年間一日も思わないことの無い日々でしたが、やっとの思いで父の眠る地へ来ることができ胸が一杯です。

中国瀋陽に着いた日の夜、テレビで北朝鮮が日本海にミサイルを7発発射したというニュースを見て、さつそく福村団長が日本へ電話し、安否を確認しました夜でした。

お父様、遅くなりましたがようやく父の眠る地に来ることが出来ましたよ。父と別れて62年、今日は7月9日誕生日を迎え、65歳になりました。誕生日の夕食会のとき、日本遺族会より誕生日おめでとうとケーキを出してくれました。予想もしなかった出来事でおどろきました。

母を連れ4人で来たかったのですが実現できず御免なさい。母とも兄弟3人元気で暮らしています。安心してお休みください。

最後に、日本遺族会、名鉄観光関係担当の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。 7月9日 海拉爾（ハイラル）にて

孫へ伝えたいとの一心で 妻と孫二人護国神社へ

御殿場市遺族会 小池武

父は昭和20年6月20日、沖縄で30歳の若さで戦死しました。戦後の母の苦労は想像を絶する、生きるが為の闘いは云うまでもありません。若い頃の私の気持ちは母に親孝行の一念でした。

そんな私も、戦死した父、ご先祖様の御加護により、現在妻と子・孫と平和な生活をしています。毎年5月中旬ごろになると、護国神社から父の命日祭（6月）のご案内があり、妻と参拝していましたが、前年は都合が悪くなり、前々

から一度孫と一緒に参拝したいと思っていましたので誘うことに…まだ小学校低学年（四年と二年）では、昇殿参拝の意味を理解するのは難しいと思いつつ話をしましたが、あまり乗り気ではありませんでした。最終的に子ども達が遊ぶ「るくる科学館」へも行くという事を理解し命日祭に参加が決まりました。

当日は天気も良く、命日祭に参列し、最後に紅白の御幣串をお供えし、孫も真剣に参拝していた姿が、今でも鮮明に印象に残っています。

参拝後、遺品館に立ち寄り収蔵品など見て廻り、上の子は興味深げに見ていました。

孫たちが自分の曾祖父が戦争の犠牲者であることで、護国神社に魂が眠り祀られているという事を知る機会ができたと思います。

これから日本の国がどういう方向に行くのか不安多い中、人の命と平和を大切にし、英霊顕彰の理解者になってほしいと、心から願っている今日この頃です。
(平成 29 年 1 月発行の会報ごてんばより)

玉砕の島ラブアン島を訪ねて（マレーシア）

御殿場市遺族会 根上治美

毎日報道されるウクライナの悲惨な状況、なぜ同じ過ちを繰り返してしまうのか。戦没者遺族は私たちがたくさんだ。

父は二度の召集を受け、母と一緒に過ごしたのは2年7ヶ月だと話していた。戦跡巡拝に参加した母も102歳で他界した。

私も一度は参加したかった父最後の地ラブアン島、息子夫婦の応援を得て一家6人成田空港へ。途中クアラルンプールで乗り換えて、ラブアン島への到着は夜遅かった。

翌朝は静かな海、椰子の木が茂り沢山の鳥がさえずり舞う海岸。何故この島で…

私はどこまでも続く海岸波打ち際を歩いた。ただただ、歩いた。父もこの海を渡りこの海岸を見たのだろうと感傷的になる。小さな石ころを一つポケットに忍ばせ持ち帰った。小さな島と聞いていたが、廻るのに2日を要する。途中、日本の支援団体が作った平和公園（タマンダマイ）に参拝した。

爆撃で気を失い豪州兵に救出された戦友の本によると、敵上陸前、寸土を砕く艦砲射撃が連日あり、20年6月16日～21日の間に玉砕したと思われるが、広報生死不明である。

父の属する第三中隊守備地、現在飛行場付近で献灯、御殿場の水で献水、香

を焚き、帰還できなかった将兵に6人でお参りをし、「ふるさと」を歌い、最後の別れをした。涙腺が緩んだ。

夕食後、プロペラ機でコタキナバルへ。部隊の上陸した港である。19年10月に960人で編成、サンダカンに向かうも密林の行軍、65人を失い、1月6日集結完了とある。現在のコタキナバル～サンダカンには所々に穴がある舗装道路が往復700km以上、両側には椰子の木が植えられた変わらぬ景色が延々と続く。車でも大変なのに徒歩で密林の行軍、想像を絶する。

2月には転進命令がくだり撤退、2月12日より日を追って小隊ごとに先遣隊の白骨が道をふさぐ密林の行軍、生き延び健康な者だけがラブアン島へ渡った。

サンダカンの捕虜収容所跡地に記念館があり、豪州、イギリス人の捕虜1,550人移送行軍中、生存者6名のみ、まさに不幸な死の行軍である。記念館には6名の写真が掲げてあった。途中多くの戦没者墓地もあり複雑な思いだった。

二度とこの惨禍を繰り返さないよう継承していく事が遺族会の責務だと思う。

写真でしか知らない叔父を祀る

御殿場市遺族会 勝又將雄

父が亡くなり、遺族会の会員とともに、『平和の礎』を引き継いだ。昭和41年3月に地元玉穂報徳社が発刊したものだ。戦死した叔父の尋常小学校時代の教科書も一緒にあった。少年時代の叔父が墨で書いた名前がある。写真でしか知らない戦死した叔父の唯一の遺品となっている。

『平和の礎』は、先人たちが戦後20年の節目を意識して編纂したもので、編纂委員長の土屋正夫氏の書かれた「序」には「終戦後20年、移り行く時代に私たちの胸裡から忘れがちな英霊のこの崇高な精神を深く心に刻んで、心新たに玉穂の皆さんと共に明るい楽しい平和な社会を築き上げることが、英霊に応える道であり、今日の大切な務めであると信じます」とある。当時忠霊塔に奉祀されていたのは玉穂地区戦没者105柱。戦争体験者がかかわって編纂作業をして完成させた。それから半世紀が過ぎている。

地元遺族会の活動を父から引き継ぐも、地域の姿で知らないこと、わからないことの多いことに愕然とした。何より、教えてもらおうとすると、親戚、近所で長老の立ち位置の方の多くが亡くなっている。相談相手の「いない」その現実に呆然とした。戦後70数年の歳月を改めて思ってしまった。

いつしか、手元にあった昭和63年12月に発刊された地元の郷土史『中畑の歴史』を開くことが多くなった。先見性のある発刊事業を担われた先人に深い

敬意と感謝をする。

そこに掲載されている「中畑区内除隊及復員者名簿」をめくった。区ごとに氏名、階級、在役年数、主要任地、帰還年月日が掲載されている。全部で131人の名前がある。原典資料は『玉穂郷友会従軍者名簿』。すでに父の兄弟は全員他界している。この資料で、初めて我が叔父たちの様子が分かった。私の子ども時代に、父を含めて叔父たちにも軍隊時代の話をおもひに聞いていない。兄弟に戦死した者がいることによって、自分の体験談は控えていたのかもしれない。

父の兄弟で成人した者は7人であったが、男6人中5人が召集されている。

昭和17年10月 二男 召集

昭和18年8月 長男 召集

昭和19年6月 三男 召集 … 戦死

昭和19年9月 四男 召集

昭和20年2月 五男 召集

戦争末期の国、国民の厳しい状況が如実である。戦争に行かなかったのは末弟の叔父ただ一人。叔母は少女時代に病により視力を失っていた。祖父母は成人した担い手の子どもたちのいない生活で農業を営んでいた。貧農生活そのもの。多分どこの家でもそうした状況であったのだろう。

この「先の戦争」の結末として、中畑地区内だけで58人の戦死者を数えている。そのうちの一人が叔父である。

40年近く前、突然父がパスポートを取得したいと言うので、手続きに静岡まで送迎した。まだ県庁で発券していた時代である。しかし、その直後に体調を崩してとうとう一度も使われずに亡くなってしまった。

戦友たちにかかわりある旅行社から、「フィリピンからのバシー海峡慰問の旅」の案内をもらい、そこに参加するつもりでいたらしいことが後で分かった。思いはあっても状況が許さなかった歳月だったのだろう。

先般亡くなった叔母が病床で、「子ども時代には家のために粉骨砕身働かされ、大人になって戦争でお国のために命までささげたのにあまりに不憫だ」と、台湾バシー海峡で撃沈され亡くなり、いまだに遺骨が故郷に戻らないその兄を語り、さめざめと涙を流した。「必ず現地に行って供養してくるから」と約束したのが最後の言葉となってしまった。コロナ禍でいまだ実現していないのが切ない。

戦死した家族の最後を知っている者がいればまだ救われたという話も聞く

が、玉砕とか撃沈とか戦友たちがだれ一人残らず、その戦闘そのものが歴史から消されていることもある。戦死した叔父は所帯をもたないまま召集され戦死し、直系の血族もいない。父たち兄弟の無念さも今なら理解できる。

いまだに外地戦没者の半数近くが戦地に眠ったままで、遺骨収集も進まないのが日本の現状である。人は誕生すれば必ず肉体的な滅びがある。それが一度目の死である。二度目は人の記憶から消されることである。^{ねんご}懇ろに先祖供養している家庭であっても世代が交代していく中で、戦没者に対する思いは複雑だろうと思う。人として、「時が過ぎたので」と、切って捨てるような対応はだれもできない。戦没者を「二度殺してはならない」と、毎年「暑い夏」にその思いを新たにし、他の先祖と異なる軍服姿の叔父の写真を見ては、子や孫たちに話をしている。

運命を変えた戦争

御殿場市遺族会 岩田俊光

私の伯父岩田綱良は、実業学校卒業後、両親妹達と実家の農業を営んでいましたが、昭和16年25歳で応召し、昭和18年暮に旧ビルマフーコン県で偵察任務中に狙撃され、27歳で戦死しました。私は伯父の顔は勿論、声すら聞いた事はありません。家に残るわずか一枚の写真を見ただけです。綱良の両親（私の祖父母）は悲嘆の中、綱良の弟（私の父）を家に呼び戻しました。弟は既に旧農林省の職員でしたが、家を継がせる為に退職させたのです。その時祖父は私の父に「お前の兄綱良は、地元では評判の優秀な男だから、復員しても、地元の役職を色々やるようになって、家の農業はあまり出来なかったかもしれない。慣れない農業を憶えて運命と思ってこの家を継いで欲しい。」と話したそうです。

昭和23年に私の母が父の許に嫁いできました。それから私の両親は、朝日よりも早く起き月が沈むまで働いて、夜には床にも入らず上がり戸で寝た事もありました。私も小学校二年からは田植えもして、必死で手伝いました。それでも生活は困窮を極め、私の靴はゴムで6年間同じ靴でした。そんな時に国から頂いた戦没者の恩給は本当に有難かったです。

私が社会人になってからようやく生活も安定し、私にも子供が出来てからふと思います。この戦争で伯父が亡くなっていなかったら、私も私の子供達もこの世に存在しなかったかも知れない、何とも言えない運命のやるせなさを感じました。そんな事を思いながら、すべての戦死戦没者と伯父の御霊が安らかならん事を祈ります。…合掌

父のいない生活

御殿場市遺族会 杉山いとゑ

祖国を愛し祖国の為に散った父。父を全く知らない私。小さい頃の苦しさ、悲しみは、片時も私の心から忘れた事はありません。

母より聞かされている父の事は、大阪の尼崎の工場で働いていた昭和18年11月召集を受け、マニラでアメリカ軍との戦闘で負傷し、マニラ病院より大阪の陸軍病院に運ばれ19年4月15日戦死した。

子は親の背中を見て育つと言います。私は母親が父替りとして村内の仕事や農業を女手一つでやり、朝早くから家の仕事、そして勤めに出かける。帰ってくると月の光で農作業をしている姿が、今でも目に浮かびます。近所の友達の家で暗くなるまで遊び、一人の淋しさをまぎらわしておりました。特に雷が鳴ると、あまりの恐ろしさに布団をかぶって、一人で泣いていた事が今でも忘れられません。戦争という二文字で誰を憎むことも出来ず、只々生きる事だけを目標として母と過ごして来ました。成人になった私は、苦勞して育ててくれた母に恩返しをしてやりたいとの一心の思いでした。

今では三人の子供達もそれぞれ就職し、苦しいながらもようやく世間並みの生活が出来るようになりました。人に言えない苦勞や近所の家庭をうらやましく思った10代。母と二人で過ごした過去が、夢の内に過ぎ去った感じが致します。せめて子供達には私が味わった苦しい経験はさせたくない気持ちで一杯です。

今の時代は物は豊富にあり、お金さえあればどうにでもなる時代に変化した今日、たった半世紀前の出来事が夢のようです。今ある豊かな生活の陰に、数えきれない犠牲者によって生まれる数々の不幸な戦争を、二度と繰り返す事のない様願っています。

平成6年4月15日、父の五十回忌の法要も家族全員にて実施する事が出来、父への孝行ができたように思っています。

(平成7年7月発行の平和へ乃道のりより)

私の戦中戦後

御殿場市遺族会 勝又静江

平成6年8月、永い年月気にかけてくれた心やさしい夫とともに、肉親が眠る北満の地に立つ事ができました。かつての満蒙開拓青少年義勇軍の人達の訪中に便乗しての8日間の慰霊の旅でした。その中には私と同じように母と弟妹をソ満国境で失った、元中隊長の息子さん(大学教授)も一緒でした。

在郷軍人だった父は、日支事変が勃発すると間もなく応召、私が小学校二年

の時でした。母は幼い子供達を育てながら祖父母を助けて野良仕事や養蚕、竹行李作り等に精出して夢中で働き、毎夜のように神社へ丑の刻（午前二時）参りをして父の無事を祈っておりました。上海、南京等の第一線で戦っていた父は2年後に無事帰還しましたが、その翌年家が全焼したのがきっかけで、義勇軍の幹部として渡満いたしました。

満蒙開拓青少年義勇軍とは、14歳位の少年が、満州は日本の生命線、五族協和、王道楽土建設といった当時の国策に大きな夢を抱いて渡満、一年間の訓練を経てソ満国境近くへ開拓団として入植、軍事教育を受けながら大地を耕し、自分達と関東軍の食糧増産に励み、お国のために尽くした人達の事です。

日本が太平洋戦争に突入して戦果が華々しく報道されていた昭和17年3月、国民学校初等科の第一回卒業式に、父はいかめしい軍服姿に金鵄勲章をつけて、来賓と父兄を兼ねて出席していました。卒業生代表にも選ばれ、進学も決まって最高に幸せな私の卒業式でした。父は家族を呼び寄せるために帰国し、私の卒業式に出席できたわけです。私は進学のため祖父母と残ることになっていました。祖父母に非常に可愛がられていたので、私が残らなければ母は父のもとに行かれなかったのです。御殿場実業学校（現御殿場高校）入学式のあと沼津駅ホームまでの見送りが、肉親との最後の別れとなってしまいました。

やがて食糧事情が悪化し、買う衣料品もなく、母親代りの祖母は私の弁当を作るための米の買い出しに苦労し、セルの着物を染めてセーラー服やスカートを作り、学校の裁縫の教材には古い着物をほどいて手まめに洗い張りして整えてくれました。向学心にもえ、父母と遠く別れてまで入った学校なのに、好きな英語は二年から廃止、毎日のように田植えや畑うないの勤労奉仕と軍事教練ばかり。今思えばそんな悲惨な学校生活でも、すべてお国のためと思い、従軍看護婦になりたいと本気で考え、神風の起こる事を信じて終戦のその日まで戦争に負けるなど夢にも思いませんでした。人類が殺しあう戦争に何の疑いも持たなかったのですから、軍国主義教育の影響は本当に恐ろしいものです。

昭和20年8月9日ソ連参戦。それまでに若者はほとんど現地召集され、女、子供、老人ばかりのソ満国境の開拓団は、頼みにしていた関東軍に見捨てられ、悲惨な逃避行が始まったのです。1カ月ほどの食糧とわずかな身の廻りの品を荷車に積み、当時11歳の弟がその荷車を引き、8歳の妹は赤子を背負い、母が2人の幼子の手を引いての逃避行では、どうして気の遠くなるような長い道のりを逃げる事ができましょう。

母達は二度に亘るソ連戦車軍の攻撃を受け、砲弾に散った者、又子供達を道づれに自害し果てた人も多く、全滅に近い状態だったと聞きました。せめてその

時父と一緒にいたらとふびんでなりません。応召中の父は牡丹江の収容所で栄養失調のため死亡したと推定されていますが確かな事は何もわかっていません。

満州で一番の犠牲になったのは開拓団の人達でした。奇跡的に生還した人達の手記には、ぼろぼろの衣服をまとい、靴は破れ、食べるものとしてなく、灼熱、極寒の中の逃避行、足手まといの子供は殺すしかなく、ソ連軍と匪族の襲撃、坊主頭の婦女子でも犯されて自害する者、まさにこの世の地獄絵巻が書かれています。苦勞して奉天あたりまで辿りついても、収容所で病と栄養失調でばたばたと多くの人が命を落としたのです。

満州からの仕送りがなくなってからの祖父母と私の生活は大変でした。祖父は苦勞して求めた土地を売り、祖母の作っただんごを横浜のやみ市へ売りに行ったりして生活していましたが、私を立派に卒業させてくれました。未帰還者として扱われていた息子達の無事を毎日神に祈り、「必ず帰ってきます。」という占い師の言葉に一縷の望みを託しながら、やせて病がちだった祖母は、私が村役場へ就職後まもなくこの世を去りました。最愛の祖母を失い、どうして私一人だけ生き残ったのかとうらめしく、一時は自殺まで思いつめました。でも私のまわりの人達は皆私を可愛がって下さいました。生活のために始めた勤めも次第に生き甲斐となり、好きな人と結婚することができました。

祖父の亡きあと戦時死亡宣告の手続きをして戸籍を抹消し、遺骨のない7人の葬儀を済ませて供養いたしました。

私の子ども達が当時の父母をとうに越える年齢となりました。それでも私の父母はあくまで若く立派で、弟妹達は幼いまま、私の中に生きています。

戦争の犠牲者は私達だけではありません。一部の軍部の人達のために日本人は加害者でもありました。命を軽んじる戦争に正義などあろうはずがありません。

激動の時代に生きた過去に思いをはせ、又、ぜいたくな日舞の発表会の練習に励みながら、今のもったいない程の幸せをかみしめております。

戦後五十年、この辺で私の戦後も一区切りつけたいと思います。そしてこれから決して戦前でない事を祈りながら。

(平成7年7月発行の平和へ乃道のりより)